

<資料紹介>大妻女子大学蔵：
『平治物語絵巻 信西巻』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小井土, 守敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7005

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〈資料紹介〉大妻女子大学蔵『平治物語絵巻 信西巻』

小井土 守敏

本学図書館所蔵『平治物語絵巻 信西巻』を紹介する。

『平治物語絵詞』（『平治物語絵巻』）は、平治の乱を題材とした『平治物語』に基づいて製作された絵巻物で、現在、『三条殿夜討巻』（一巻、ボストン美術館蔵）、「信西巻」（一巻、静嘉堂文庫蔵）、「六波羅行幸巻」（一巻、東京国立博物館蔵）の三巻と、「六波羅合戦巻」の断簡五葉（大和文華館ほか蔵）の伝存が確認されている。「六波羅合戦巻」については、白描略模本一巻（江戸後期制作、東京国立博物館蔵）が現存しており、先の断簡五葉の適合が確認された。この他、彩色模本の彩色模本「待賢門合戦巻」一巻（江戸後期制作、東京国立博物館蔵）が現存し、その原本の確認はできていないものの、『平治物語絵詞』としては、以上五巻分の存在を確認することができる。

日本古典籍総合目録データベースによれば、「信西巻」に限ると、静嘉堂文庫蔵の原本を始めとして、東京国立博物館、東北大学、天理大学、青牛文庫（安田鞞彦個人文庫。現在の所蔵状況は不明）、国文学研究資料館等に所蔵が確認できるが、東京国立博物館蔵本以下は近世期に制作された模本と考えられる。本稿で紹介するのは、「信西巻」の彩色模本であり、二〇一三年に本学所蔵となった本であるが、右のデータベースに登録されている本との重複はないと思われる。まず、

以下に略書誌を示す。

大きさ 縦三六〇×全長九四一五ミリ (墨付 八六六四ミリ)

表紙 濃緑緞子花模様入り

見返し 金切箔散らし

料紙 鳥の子紙 軸 黒檀(直径二五ミリ)

蔵書印 (巻首下方から)「秋豊蔵記」(方印・印主不明)／「九曜文庫」(長方印・印主中野幸一氏)

箱書き 箱表「平治物語絵巻」／蓋裏「熱田神宮禰宜山本文彦題匣」

その他 江戸中期の制作。箱書きを行った山本文彦氏は、昭和五八年に権宮司になられているので、禰宜としての

書名はそれ以前である。紙数・紙幅については次頁の一覧参照。

以下、本書の特徴を述べていこうと思うが、本稿において、その原本と想定される静嘉堂文庫蔵本との比較は、小松茂美編『日本の絵巻12 平治物語絵巻』(中央公論社、一九八八、以下、『日本の絵巻』)によって行っている。『日本の絵巻』の凡例によると、静嘉堂文庫蔵本の大きさは、縦四二七×全長一〇一二八ミリとのことであるので、本書は、紙高にして六七ミリ小さいということになる。紙数にしても、静嘉堂文庫蔵本は一七紙で継いでいるのに対し、大妻女子大学蔵本は三八紙を継いでおり、一紙の幅はだいぶ小さくなっている。一覧を見ると、紙幅が二七五ミリ程度ではほぼ共通しているもので、本書に用いられた料紙は、いわゆる美濃判(概ね三九〇×二七三ミリ)の鳥の子紙であり、その長辺を継いでいったものと言えよう。なお、一覧に見るように、絵と詞は料紙を異にしており、その点は静嘉堂文庫本と共通する。

その模写の姿勢は、原本(静嘉堂文庫本)に対して極めて忠実である。鎧の札などの極めて細かいところまでは模していないが、人物の配置、表情、建造物や木立の様子まで、絵の構図や色味については忠実に写そうという意思が感じられる。静嘉堂文庫蔵本には、画中の人物についてその名を記すためと考えられる短冊形が空欄のまま用意されているが、こ

紙数・紙幅・内容

紙	幅 (mm)	内 容		
第1紙	275	挿絵第一段	公卿僉議のために内裏へ向かう人々	
第2紙	271			
第3紙	272			
第4紙	271			待賢門
第5紙	269			門内で昇殿していく公卿たち
第6紙	272			藤原信頼による臨時の除目
第7紙	273			
第8紙	278			
第9紙	120			
第10紙	269	詞書第一段	8行	
第11紙	70		2行	
第12紙	260	挿絵第二段	掘りおこされる信西の死体	
第13紙	277			
第14紙	278			岩肌に松と杉の木立
第15紙	277			信西の首を切り取らせる出雲前司光保
第16紙	278			木立のなか都へ引き上げる一行
第17紙	270			
第18紙	136	詞書第二段	2行	
第20紙	275	挿絵第三段	神楽岡の光保邸で、藤原信頼、別当惟方による首実検	
第21紙	275			
第22紙	274			
第23紙	275			
第24紙	94			
第25紙	108	詞書第三段	3行	
第26紙	110		3行	
第27紙	258	挿絵第四段	三条河原で、信西の首を検非違使資経に引き渡す	
第28紙	272			
第29紙	260			
第30紙	275			都大路を渡される信西の首
第31紙	280			
第32紙	278			
第33紙	275			(無地)
第34紙	250			
第35紙	20			獄門の棟木に吊される信西の首
第36紙	276			
第37紙	280			
第38紙	43			

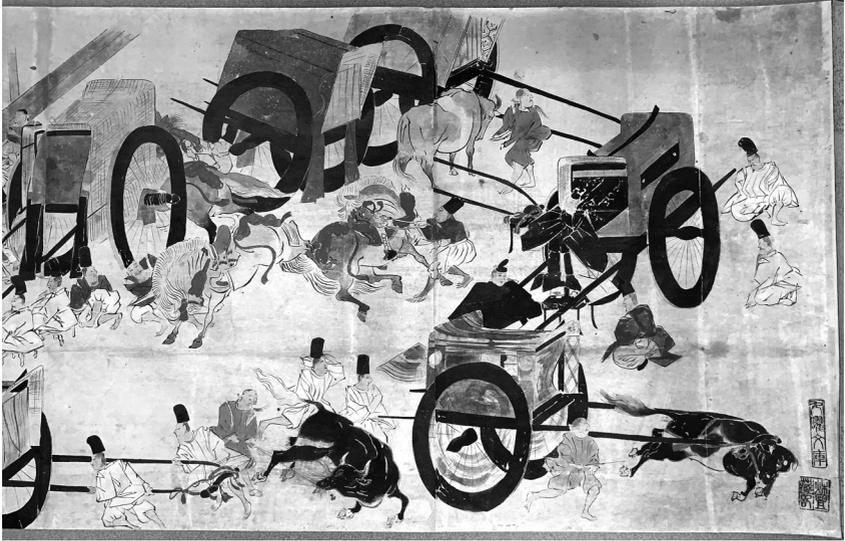
合計 8664

これらの短冊形についてもしつかりと写してある（画像5など）。静嘉堂文庫蔵本の挿絵第四段、都大路を渡される信西の首を描く武士の群像の部分（『日本の絵巻』42頁）には、絵巻が完成した後についた傷と思しき斜線が確認できるが、大妻女子大学蔵本はその斜線をも書き写している（画像7右側）。かように、挿絵第一段や第四段に見るような、武士たちの群像も、人物を省くことなく丁寧に写しているが、ただ一箇所、挿絵第二段の四つめの場面、木立の中都へ引き上げる一行を描く第十七紙にあたる部分（『日本の絵巻』33頁）において、木立と岩山の隙間に顔を覗かせている武士を一名、描き落としている（画像4中央）。他の場面の模写の態度からすれば、これは単純な書き落としてであろう。

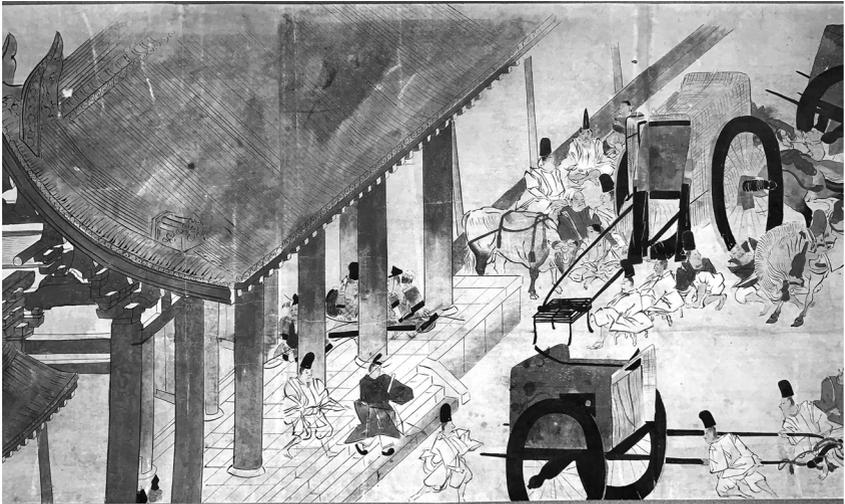
詞書についても同様で、配字・配行、仮名の字母および字形、墨継ぎの箇所に至るまで、忠実に原本を模している。ただ、字形の模写に注力するあまりか、筆勢に欠けるところもあり、詞書第三段の三行目、「あふちの木」の「ふ」（字母は「布」）などはむしろ読みにくくなってしまう（画像6）。詞書第一段の紙継ぎは前掲一覽に見るように、料紙の幅によるものであるが、詞書第三段の紙継ぎについては、まだ料紙に余裕もあつたはずなので不審である。あるいは、詞書第一段の第十一紙、詞書第二段の第十九紙および詞書第三段第二十五紙は、もともと一枚であつたか（三紙の幅の合計は二四八ミリ）。紙継ぎで言えば、第三十五紙、幅二十ミリの何も書かれていない紙は気になるところである。

以上、大妻女子大学蔵『平治物語絵巻 信西巻』について、静嘉堂文庫蔵本に照らしてその特徴を指摘してきた。ここまで忠実に模写をしているということは、やはり静嘉堂文庫蔵の原本を間近に置きながら、——他の模本を介在させることなく——複製を製作するように書き写していったに違いない。なお、『平治物語絵詞』とは別のもので、かつて「常盤巻」と呼ばれ、今『平治物語絵巻』として紹介される絵巻がある。大妻女子大学蔵本の書名はその箱書きによるが、混同を避けるために『平治物語絵詞』（信西巻）とするのがよいかもしれない。

以下に、大妻女子大学蔵本の画像を数点と詞書翻刻を掲出する。なお、『武蔵野文学』第六十七集（特集 流布本で読む 軍記物語、武蔵野書院、二〇一九・一二）の口絵にカラー版が数点載るので参照されたい。



画像1 挿絵第一段 第1・2紙 公卿僉議のために内裏へ向かう人々



画像2 挿絵第一段 第2・3紙 公卿僉議のために内裏へ向かう人々／待賢門



画像3 挿絵第二段 第12・13紙 掘りおこされる信西の死体



画像4 挿絵第二段 第17・18・19紙 木立の中を引き上げる一行



画像5 挿絵第二段 第19・20・21紙
神楽岡の光保邸で、藤原信頼、別当惟方による首実検



画像6 詞書第三段／挿絵第四段 第25・26・27紙
三条河原で、信西の首を檢非違使に引き渡す



画像7 挿絵第四段 第31・32紙 都大路を渡される信西の首



画像8 挿絵第四段 第36・37紙 獄門の棟木に吊される信西の首

【詞書翻字】

〈第一段〉

信西ハ南家博士なりけるか高階経敏か子になりたりけれども大業をもとけさりけれハ儒官にもならず非重代なりとて弁官にもなされさりしかとも子ともハ三事をかね七辨にならひ中少将をけかし上達部にいたる然れとも今ハ露命なをあやうし十日ひそかに都を逃出して奈良方へおもむくと聞しか伊賀国境北の山中にて自害してほうつまれたりけるを出雲前司光保か郎等尋行て掘出して首を切て持来

〈第二段〉

十六日信西か首光保か神藏岡の家へ持来よし申せハ信頼惟方同車して行向て實檢す

〈第三段〉

十七日源判官資経以下の官人三条河原にて西信か首をうけ取て大路をわたし西獄門のあふちの木にかく是を見る人夢かと思けるさせる朝敵にもあらず獄門にかけらるゝほとこの罪科何事哉前世の宿業歟今生の現報歟無慙ともいふはかりなし

追記 箱書きの山本文彦氏については、熱田神宮文化部長野村辰美氏に御教示いただいた。御礼申し上げます。

本稿は、二〇一六年度大妻女子大学 戦略的個人研究費（課題番号 S2819）「流布本『保元物語』『平治物語』の物語構造」の助成を受けている。